

日田郡津江の代参講

半 田 康 夫

日田郡前津江村尾払には、戦前まで伊勢講・莪彦山講・太宰府講・綾部講等の代参講があった。伊勢講は任意加入で、五軒くらいで講を組織していたが、他は部落の二十四、五戸全部が加入していた。籤によって代参者を順廻りに派遣したが、路銀は積立てではなく、その時々^に世話入が講員から集金して代参者へ手交したそうである。

伊勢講は、だいたい三年に一度、二、三人の代参者を出した。出発にあたっては講員が饅別を持ってミタテにくる。代参者の家ではオミキを出して講員とともに門出を祝い、村境まで見送るのが例であった。同地の佐藤籠造氏（七十四才）が明治四十一年に代参した時には、同行希望者四人を加えて六人の一行であった。まず徒歩で日田・久留米へ出、それから汽車で尾道へ、ここから四国へ渡って金毘羅さまに参詣しそのあと姫路・大坂・高野山・吉野・奈良等を見物して伊勢へ参り、さらに東京・日光まで足をのびたので、三十二日

ぶりに津江に帰った。氏の先代は六十三日間もかかったということである。

留守中、家人はカゲゼンをすえた。そのカゲゼンの飯椀のふたの内に露が多いと代参者は元氣だ、乾いていると病氣をしている、などと吉凶を占ったという。また鶏を食べないように氣をつけた。これはお伊勢さまに鶏がいるからだといわれる。参宮予定日には、きょうはお宮めぐりの日だというので、家人は日田の大原八幡宮か氏神さまに参詣した。親類や講員も留守中に酒一升か豆腐十丁、或いは重箱二重ね程度のボタモチを持って留守見舞にくる。これに対しては一々お膳を出したそうである。ゲコウ（下向）の前日には、神棚にオゴクのほか特にオミキを供え、また明日帰村の旨を親類や講員にしらせる。

下向の日には一同連れだって村境までサカムカエ（坂迎え）に行く。むかしは必ず馬をひっぱって行って、下向の

者を自宅にとどけるまで絶対に馬から降さなかったそうである。村境から先ず氏神に参詣し、それから自宅へ向う。下向の翌日くらいに盛大な下向祝いをした。これによべれた人は酒一升に餅一駄（四斗）を持ってくるならわしであった。餅は、ホツカイとよばれる一種のひつに入れて、牛の背に乗せて運びこむ。ホツカイというのは、よろいびつに足をつけたようなもので、諸祝儀の贈り物の時には必らずこれを用いた。一ひつに二斗の餅が入る。下向祝いの時にはホツカイ二個を牛の背につけるから、四斗の餅を贈るわけである。

祝いの席上では、座敷の床の間の前で、下向者がその親、もしくはその家の男子、或いは親類の年長者に対して無事の下向を報告し、正座に坐ってウタイ（謡曲）を出す。報告を受けた者がこれに答えてウタイを出し、再び本人がうたい終ると、一まわり冷酒が出る。そのあとは爛酒が出て賑やかな下向祝いの宴となる。この時には帰宅できないくらいお客に酒を飲ませるのが例となっていたので、参宮すればあとの座がほねおる、といわれたほどである。

下向祝いのあと、翌日くらいに講員や親類におみやげを持ってお礼に行く。おみやげはケンザキ（お札）やふろしき・

箸など、子供には貝細工や筆箱などを配ったそうである。

英彦山講では毎年春秋の二回、代参者二、三名を籤で決めて参拝させた。春は、英彦山でヒコサン市の立つ旧の三月十五日、秋は豊前坊さまの市の立つ旧八月丑の日であった。前津江村星払から日田・小野（日田市内）を経て英彦山までは九里のみちのりといわれ、たいいてい市の前日に出て市の翌日帰村する二泊三日の日程であったが、達者なものは市の当日の早朝出立して翌日帰った。英彦山にヒツキ（日着き）する、これが自慢の種ともなったのである。

代参者のほかに数名の初参りがついて行くことが多かった。一人前になったばかりの、十五、六才の青年男女である。（初参りを以って一人前になる条件とする、というほどのことはなかったようである）。女性は、むかしは英彦山の鬼杉の下までしか登れなかった。子供ができるとなかなか参詣できないというので、嫁入り前に必らず参詣したものである。

家族の者や村びと（講員）は村境まで見送ることになっていた。英彦山では春講坊に泊り、翌日奉幣殿で五穀豊饒を祈願し、ムシフダ（虫札）を受け、おみやげのヒコサンガラガラ（土製の鈴）を買う。さらに上宮や豊前坊にも参詣するが

豊前坊さまは牛馬の神であるから、牛馬の安全を祈って、境内のササを取ってくる。

英彦山詣りは「半参宮」といわれ、伊勢参宮に次いで重視された。そして初詣りの者がいる時に限って、村びとが坂むかえをしてくれた。帰宅すると、初詣りができた、というので、村びとや親類縁者が酒やボタ餅を持って祝いにくる。酒が出て、やはり伊勢代参の下向祝いのような盛大な祝宴になった。代参者は講員にお札やガラガラを配るだけで、祝宴は張らなかつた。しかし、春の代参者が帰村する旧三月十六日は「村ヨコイ」として、部落全戸が農仕事を休む。秋は村ヨコイとはせず、参詣者だけがヨコウ程度であつた。代参者から配られたお札は田に立ててムシよけとし、ガラガラは戸口にさげて魔よけとした。ササは牛馬に食べさせたそうである。

太宰府講も年二回、旧二月二十五日と八月二十五日に代参者を二人ずつ太宰府天満宮へ送った。博多見物をする事が多かったため、たいてい二泊三日の旅であつた。天神さまは作神さまと考えられているが、佐賀県の綾部さまは風よけの神さまである。したがって綾部さまへは二十十日の前、旧盆の前後に二名の代参者を二泊三日の日程で送る。太宰府への

代参の場合はほとんど坂むかえをしなかつたが、綾部さまの場合には必ず坂むかえをしたそうである。そして後者の場合代参者が受けてくるお札には、家の棟にはる大札と、田ごとに立てる小札との二種類があり、前者は講銀でもって講員数だけ求め、後者は希望者からの依頼に応じて受けて帰つたといふことである。(大分大学学芸学部助教)

南海部郡本匠村笠掛のイノコ唄

大正の末ごろまで、旧十月の一番イノコと二番イノコにイノコを祝つた。この日は家康の生れた日だから祝うのだという。子供たちが、次のような歌を歌いながら、ボテ(ワラ東)で地面を叩いてまわつて、イノコモチをもらつた。

ことしや豊年ぞ 穂に穂がさいて 実(み)に実(み)がなつて 米(こめ)が
一分(いちぶ)に七俵(ななごら) 酒(さけ)が五文(ごもん)に七銚子(ななさし) 福(ふく)の神(かみ)は入(い)つていけ 貧
乏(ひん)神(かみ)は出(い)ていけ

(モチをくれない時には)

イノコモチつかんものは 鬼(おに)生(う)め蛇(へび)生(う)め 角(かく)ん生(う)えた子(こ)生(う)め
(半田)